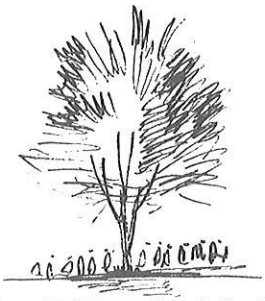
ひかりのこ

光の子



No.158　2013.3.25

●年間聖句　あなたの口を開いて弁護せよ。ものを言えない人を、
犠牲になっている人の訴えを。（箴言３１章８節）

「春におよばれ」　表紙絵・中島 由起子

「春の旅」

春めくや斑を不揃ひに牧の牛

みちのくの酒に鳥引く話など

落ち合うてどの道行くも花の雨

蝶生るる風の継ぎ目を光らせて

行列に花降りかかる祭かな

春の旅島が寄ったり離れたり

行く春の砕けて白き片男波

俳人　黛　まどか

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 埼玉県加須市砂原277　印刷／プリンテング瑛和

新年度を迎える

施設長　田　中　郁　夫

新しい年を迎え、1月26日に地元後援会の皆様方が、「今年も頑張ろう」と蕎麦会を実施して下さいました。前日より、うどん玉づくりなどの準備、当日ご婦人方がデザートなどの準備、昼食時に小学校の先生方をお招きしての賑やかな一時を過ごしました。皆様方のお支えにより、28年の歩みが終わろうとしております。本当に沢山の方々に祈り支えられたことに、感謝申し上げます。

今年度は34名でスタートし、すぐ2名の入所、年度途中で1名が家庭引き取りとなった後も入所があり、この年度を終えようとしております。この間も各児童相談所よりの入所依頼は途切れることがありませんでした。常時児童養護施設は満杯状況にあり、施設への入所児童は、虐待相談の最も危険な状況に置かれた子どもたちになります。

埼玉県は、昨年実施した県内の児童養護施設や児童自立支援施設24カ所を、過去10年間さかのぼっての「児童養護施設等退所者への実態調査」を報告しました（退所児童2359人中施設が連絡可能な児童612人の内148人が回答。回答率24・2％）。退所後に困ったこととして「孤独・孤立感」（44・1％）や、退所後三年以内での離職率の高さ（74・4％）、その後の就職困難等が揚げられ、「職場・学校での人間関係に困っている」（30・3％）で、困った時の相談相手として施設職員が一番多い結果となっておりました（25・0％）。

当施設においても事前調査を行いました。これまでに110名の子どもたちを受入（内36名入所中）、その内29名が家庭引き取りになり、37名が施設から自立していった子どもたちでありました（内13名が上級学校進学。中退者も含む）。残り8名の内、里親へ2名、他機関等へ6名となっており、連絡が取れないケースは家庭復帰した2ケースと、自立した2名でありました。

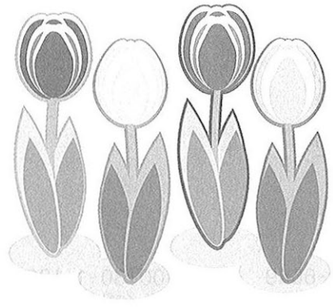
退所した子どもたちの把握と連絡先は殆ど判る状況ではありましたが、確かに3年以内の離職率は高く（58％）、そこには、18歳で社会に出ていくことの困難さが見え、彼らの生い立ちからくる自己肯定感の低さや、他者との関係づくりが下手で、生きづらさを抱えていました。

「困ったり疲れたらいつでも帰って来なさい」と伝えて社会に送り出しています。休息と次のステップに繋げる支援を行っています。

今年度は、2名が高校を卒業し、1名は上級学校へ、他の1名は、就労支援を受けながら生活支援施設への移行をします。

光の子どもの家が今後も「実家」となっていくためには、子どもたち一人ひとりとの信頼関係を築きあげていくことだと考え、これからも職員一同頑張ってまいります。

新しい年度も皆様方の祈りとお支え、ご指導を宜しくお願い中し上げます。



「共育ちカンガルー日記」（23）春よこい

近藤みちる

自宅から幼稚園までの通園路は、子どもの足で15分ほど。国道から一本通りを入ると、いきなり目の前に相模湾の穏やかな海原が広がり、よく晴れた日には伊豆半島や房総半島が一望できる。1月にA園を卒園しK幼稚園に仮入園したユキは、週に3日この道を歩いて幼稚園に通っている。まだ2月の朝の風はきりきりと凍ててかじかむほどだが、ユキは大好きな制服の上にコートを羽織ることを頑として拒み、日向を探して飛んだり跳ねたり、歌ったりして、元気いっぱいに通園している。

発達に遅れのない健常児の集団にユキを入れるのは、これが初めてのことである。園児3人に先生1人が付いてくれたA園と違い、幼稚園では26人の園児に先生は1人。その上、クラス活動の内容も複雑になり、展開も速く、ユキにはついていくだけで大変のようだ。また受ける刺激の量も格段に多くなり、帰宅するとしばらくぐったりと横になっていたり、妙に興奮して多動になったりと、A園の頃には見られなかった様子がたびたび見られるようになった。それでも幼稚園が大好きで、あっという間にお友達の名前を覚えてしまい、園で覚えた歌やお遊戯を家でもやってみせてくれるようになった。「じぶんでできる！」と親の介助を拒み、自力でやり抜こうとする自立心も急速に育ってきた。

2月の末、幼稚園では一年間の活動の成果を披露するために、生活発表会が開かれる。冬休みが明けると、ユキのクラスでも合唱や合奏、ダンスなどの練習が繰り返され、音楽の大好きなユキはみんなに混じって練習に参加するようになった。

実はこの発表会、ユキは仮入園児ということで参加できない旨を、前もって園から伝えられていた。だがユキは当然のように自分も発表会に参加するつもりになっていたようで、予行練習の際はみんなと一緒に舞台に上がりたがって、説き伏せるのに手こずったことを、その日のお迎えのときに知らされたのだった。

無理もないことだと思った。仮入園など大人の側の事情で、ユキにはどうでもいいことだ。練習は一緒に参加しているのに、本番は出られないなんて、酷なことだろう。

「ユキもせいかつはっぴょうかい、やるの！」そう言って譲らないユキを見ていて、私は胸がいっぱいになった。あの、いつもぽつんと独りぼっちで遊ぶばかりだったユキが、自分の気持ちを表出することが苦手だったユキが、お友達と一緒に発表会に出たいと必死に主張している。その気持ちをなんとか形にしてやりたいと思った。

私は思い切って、ユキの発表会への参加を園に願い出た。もともと音楽は得意だし、みんなと一緒なら何とか出来るはず。やりたいという意欲を尊重してはいただけないかと。

園の方でも職員会議の場で検討はしていただいたようだが、「仮入園ということ、一年間の積み重ねの成果を発表する場であること」という理由で、結局参加することは許されなかった。担任と相談し、本人には「本番は見るだけ」という統一した言葉で説明し、納得させていこうということになった。

園の結論を笑顔で呑み込んでみせたその実、私は少なからず傷ついていた。療育の場では、ユキがやりたいと主張したことを挑戦させてもらえなかったことなど一度もなかった。でもここは幼稚園であって、療育の場ではない。頭ではわかっていても、気持ちがついてこなかった。何より、これしきのことで傷ついてしまう自分のひ弱さが不甲斐なかった。

だがその夜、私はパパのこんな言葉で、はっと目が覚めたのだった。

「ユキは説明すればちゃんとわかる子だから大丈夫。それよりも『うちの園へどうぞ』と快く言ってもらえたときの、あの天にも昇るような気持ちを忘れないでいよう。これからずっと、ここがユキの居場所なんだから。」

パパの言うとおりだ。春になって正式入園すれば、ユキはここに根を張り、ここで花を咲かせるだろう。ユキらしい花を。

それから発表会までの間、私たちは園と協力して、「発表会は見るだけ」という言葉で繰り返しユキに説明を試みた。そして発表会当日、ユキは自ら「みるだけ」と言いながら、観客席でクラスの発表を静かに見学することができたのだった。その背中は実に凛としていて、眩しいくらい立派に見えた。

帰り道に見かけた梅の木は、白い花をいっぱいに咲かせ、やさしい香りを漂わせていた。日向が暖かかった。春はすぐそこである。

にこにこと解けて二月の雪だるま

みちる

エッセイ

一枚の切手

彫刻家　中島　睦雄

一枚の切手のことを。

※

一枚のCD

だいぶ以前のことである。

ロシアの国立モスクワ合唱団が来日した。軽い気持ちでそのコンサートに行ってみたところ、これが実に素晴らしかったのである。

照明を消した暗闇の中に、静かな歌声が響いてくる。その時、次々にステージに入ってくる女性歌手の手に、小さな灯が持たれ、音楽の進行に伴って、男性歌手も全部揃ったのだったが、前面の女性歌手の美しい赤い衣裳と相俟って、数十人のメンバーの合唱が、誠に感動的であった。素晴らしかった。音楽については何の知識も感性も持ち合わせていない人間の心にも、しみじみとした何かが伝わってきたのであった。合唱って良いもんだなあと、つくづく思い知らされた。

その後、この合唱団の二、三か所での公演に、私はオッカケて行って、それぞれの会場で、最初の感動と同じようなものを受け取って満足であった。

そこで、記念に買い求めたCDを、その後、家で何度も何度もくり返し聞いては、喜んでいたものであった。

友達が来ると、無理矢理にでもこれを聞かせて、こちらが一方的に悦に入っているというありさまであった。

したがって、私にとって、大切な一枚のCDなのであった。

そんなことをくり返しているうちに、友達の誰かに、それを貸したのである。誰に貸したか忘れてしまった。そしてそのまま、いまだに返って来ない。誰に貸したんだったろう、残念でならない。

「だいぶ前に借りたんだよね。悪かったなあ。」とか言って、突然返してくれる人の現れるのを待つしかないようである。

※

一枚の絵

斎藤与里という画家がいた。昭和35年に75歳で亡くなるのだが、生前、私は中学生の頃、高校生の頃も、当時の中学時代の先生に連れられて与里先生の講習会に参加し、手を取って教えていただいたことがある。

与里先生は、地元の中学を中退し、フランスに渡り、西洋の伝統芸術、それに新しい息吹の高まりの中に身を置いて、多くの精神的な土産を持ち帰った。そして、今から百年も前に、高村光太郎や岸田劉生らと共に「ヒュウザン会」というものを作り、銀座で展覧会を開いた。これは、当時の日本の美術界に、新しい光を投げかけるものとなったのである。

私が以前勤めた学校で、放送室の隣のガラクタ置き場で与里先生の絵を見つけたことがある。その頃、この高名な画家の作品であることを、誰も知らなかったのかも知れない。フランス留学中の作らしく、西洋の風景を描いたものであった。

私は、誰にも話さず、密かに持ち帰ってしまったらどうだろう、と思った。しかし、こんな高名な画家の作品を私が持っているという不自然さは明らかである。それに、人間の目はごまかせたとしても、ちゃんと、お天道様は見ているんだから、やはり持ち帰らなくて良かった、と思っている。

この、一枚の絵「スイス風景」は、今、与里先生の画集に納まっていて、大勢の人々の目に触れることができるのである。

聡明で優しさのあるSさんのことである。

職場でたまたま出会ったのだったが、或る時、使えなくなった封筒に、未使用の切手が貼ってあった。これが、二、三日間、机の上に置いてあった。或る時、ふと気が付くと、小さな皿に水を入れて、その切手のまわりだけ切り取ったものが、浸してあった。しばらくすると、切手は封筒からはがれて、乾かせば元通りに使えるのである。なるほどなあ。

小さなできごとだったかも知れない。こんなこと、あたりまえだと言われるかも知れない。しかし私は、このことに非常に感心させられた。

私には、そういう細かい神経が全く無かったから、びっくりしたのであった。ケチというのではない。何か、小さなものに対しての、Sさんの優しい心づかいが感じられたのである。このことを、今でも時どき思い出す。あの、たった

旧交を温める

老健施設みゆきの丘施設長　仙道　富士郎

1月19日、寒い日だった。新幹線盛岡駅に降りる。盛岡には前に一回訪れたことはあるが、宿泊した記憶はない。知らされていたホテルの案内には駅から徒歩15分とある。まだ約束の講演の開始時間までややあるので、歩いていこうかなと思った。

ところが、降り立ってみると、寒さで道は凍って光っている。転んで怪我でもしたら大変とタクシーに乗った。個人タクシーの運転手さんと話をする。人口は30万人、山形より少し大きい。新幹線で仙台から30分ちょっとで到着したので、仙台に近いのだと思い、仙台に買い物に行くのかと尋ねると、まずないという。山形からは仙台によく買い物に行くのにと思い、聞いてみると、２００キロあると言う。バスと新幹線ではスピードは違うわけだ。老人のとんでもない勘違いである。

話しているうちにタクシーはホテルについたが、徒歩ではとても15分では着きそうもない距離であった。どうして、どこのホテルでも徒歩〇〇分と嘘を書くのかなあ。気分を害してかえって逆効果だと思うが。

私の話は午後5時から始まった。20数人の聴衆である。皆、山形大学医学部卒業生のお医者さんたちである。幹事役の教え子から聞いたときに、最初、聴衆は卒業生だけだと思っていたのだが、途中のやり取りで、卒業生以外の聴衆も居るらしいと思いこんでしまったようだ。とすれば、パラグアイの話でもあるまいと思い、「私にとって研究とは何だったのか―74歳の今振り返る―」という、何年か前に特別講義で話した内容の吹き替えの堅い話にしたのである。実際は医学部同窓会の岩手県支部のたち上げに際しての講演ということだったので、それならパラグアイの話がぴったりだったなと思ってもあとの祭りである。

教え子の顔なら分かる筈だと思ったが、最初さっぱり分からない。話すのには結構緊張するから、そのことも手伝って分からなかったようだ。講演会が終わって懇親会になって近くで話をしているうちに少しずつ思い起こしていった。それにしても、思い出してもらえなかったのは、彼ら、彼女らにも責任があると思う。なにしろ、面影を残さないほどの変わりようなのである。

酒席では最初学生時代の授業をさぼって代返をしてもらった話とか、癖のある先生の真似とかが話されていたが、行きつくところは家族の話で、特に子どもたちについての話のやり取りで、話は盛り上がっていたようだ。皆、それぞれに子どもたちのことが気になる年齢に達したということである。

山形への帰路、仙台に立ち寄って、小児科を開業している高校時代の親友と会った。

ことのきっかけは、12月から顧問になったスーパーマーケットチェーンが、仙台の新開地に建設するスーパーの脇に医療ビルを建てることになり、仙台の医療事情を彼から聴くことにあった。

しかし、久しぶりにあった二人は、懐かしさのあまり、彼が選んでくれた、仙台では有名な寿司屋さんの料理の味などいま覚えていないほどに、夢中になって色々なことを語り合った。彼の実家は名取市の海岸沿いにあり、高校時代に一度お邪魔したことがあったが、大津波で跡形もなく流されてしまったということである。幸いなことに、空家になっており、家族は難を逃れた。しかし、話が進むうちに、知り合いの人が多く亡くなっているようで、彼の顔が次第に曇って行った。

3・11のすぐ後に停電になってしまった急患診療所で、手動の発電機を回しながら、6日間ぶっ続けで、患者の診療にあたった話を聞いたりすると、正義感の強い青年であった彼のことが思い出されたりして、ふと高校生時代に立ち戻った。しかし、「農業だけが正業で、あとは皆、人間本来の仕事ではない」と高校生時代に熱く語っていた、農本主義者のK君の消息を二人とも分かるわけではなく、やはり74歳の老人が二人そこに居た。もっとも会った1月20日が、彼の誕生日に当たっており、彼は74歳の新人ではあったのだが――。

「精々がんばっても、元気なところあと10年か」彼のことばは淋しくは聞こえなかったが、実感はこもっていた。

プ・リ・ズ・ム

原田家日記

昨春、高校生となった春樹。中学校まではサッカーをやっていたので、高校でもサッカー部に入部するのかと思いきや、

「俺、テニス部に入るから」

「え、サッカー部に入らないの？」

「サッカー部、先輩ヤダ！」

「じゃあ部活どうするの？」

「だからテニス部に入る」

と春樹はテニス部に入部しました。しかし『テニスの王子様』となることはできず、わずか2か月で退部。

「バドミントン部入るから」

と春樹。サッカー大好き少年なのだから、とサッカー部を勧めても全く聞く耳持たず。そのバドミントン部も一生懸命やっているとは言えず、

「俺一番ヘタクソだから。今日はやりたくないから帰ってきた」

という具合。でも、地元のフットサルの練習には友人に誘われたと嬉しそうに出かけ、

「やっぱ楽しい！」

と生き生きした表情です。

3学期になると、

「バドミントン部退部届け出したから。サッカー部入る」

と事後報告(！)。3年生が部活を引退し『目の上のたんこぶ』がいなくなったからのようです。

人付き合いが上手に見えて、実は人間関係の持ち方があまり上手ではないということを、あらためて感じた数か月でした。

池田　祐子

光の中で

佐藤家

厳しかった冬も終わり、すっかり春となりました。

私のグループに新しい子が加わりました。2歳になったばかりのかわいい優ちゃんです。最初はずっと私にべったりで、何をするにもくっついていました。ご飯を食べるのも抱っこで、食べさせないと食べません。ほかの子がいるダイニングには入りたくなくて、「あっちあっち」と居室の方を指さしていました。お風呂に入るのも最初はずっと泣きっぱなしで、手を洗うのも歯磨きも、全部泣きっぱなしでした。夜泣きも激しく、一晩のうちに数回起きて長時間泣き続ける毎日……私も他のことが何もできなくてイライラしたり、他の子に申し訳なくなったりと、切ない思いでいました。

同じグループの子たちもそんな優ちゃんを見て赤ちゃん返り。「颯太もおかけする！」「赤ちゃん布団でねる！」など、時には優ちゃんを抱っこしている私の腕にしがみついて、優ちゃんを下ろそうとしたり、それがかなわないと思えば部屋で暴れたり。

しかし優ちゃんもここでの生活に慣れてきたこの頃は、少しずつ落ち着いてきたようです。私もできるだけ余裕をもって、みんなを丁寧に見守っていきたいと思っています。

岩瀬　志穂

河のほとりで

倉澤家

1月16日は安田貴志の命日でした。その2日前の1月14日には安田貴志記念会が行われました。この日はあいにくの大雪で、列車のダイヤが乱れたり高速道路が通行止めになったりと大変な一日でした。そういえば一年前の彼の告別式の日も、とても寒い日で雪が降っていたような気がします。悪天候のため、おいでになれない方もいましたが、数名の卒園生や東大宮教会の方が参列してくださり、墓参りと記念礼拝が行われました。

あの日から一年が経ちました。一年と言えば生まれたばかりの赤ちゃんが寝返りをうち、お座りをし、ハイハイができるようになり、一人で立ち歩けるようになるほどの長い時間のはずなのですが、つい先日の出来事のような気がしています。

礼拝後の卒園生たちとの夕食会では昔話が始まり、彼にまつわる様々なエピソードが語られました。私の中の彼は幼い頃のまま。麦わら帽子をかぶり、虫取り網を手に走り回っている姿や、遊園地に行っても乗り物が怖くて、ポップコーンばかり食べていた姿、なんでも一番でなければ気が済まなかった姿は、今でも目に焼き付いています。

そして何より私を驚かせたのは「ねえ、おかあさんって何？」と尋ねてきたことでした。その後、実母との関係も始まり、二度と尋ねてくることはありませんでしたが……。

先日、あらためて数名の者たちと彼の墓参りに行ってきました。この日は快晴で、陽だまりは暖かでした。

「貴志、来年の命日は雪を降らさないでネ。」

と頼んできたのですが、彼は私の願いを聞き入れてくれるのでしょうか。

倉澤　智子

子どもたちの季節

仙道家

ある土曜日のこと、登校日と同じように早起きをした佳那と彬。私が朝食の準備をしていると、二人とも「手伝う！」と言ってくれました。私は本心では、他にやる事があるので、見ていられないと思ってしまいました。ですが、子どもたちのうきうきした表情に負け、手伝ってもらうことにしました。

すると、普段はいちゃもんを付けあっている二人ですが、相手の事を言う間もなく集中して取り組んでくれました。自分の仕事が終わると、相手の仕事を見て、手伝おうともしていました。また、「次は⁉」とやる気満々で聞きにもきてくれました。その姿はとても微笑ましかったです。

こういった事がある度にこちらの関わり方の大切さを思い知らされます。

田口　貴子

季節のおとずれ

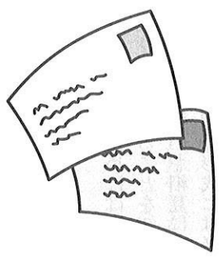
竹花家

「ねえ、最近悩みある？」

と聞いてきたのは小学生になったばかりの由子。かわいい便箋に「そうだんセンター：そうだんしたいことがあるひとはこのかみにかいてもってきてください。じゅうしょ・・でんわばんごう・・そうだんしたいこと・・」と相談センターの案内を持ってきました。中学生の美也子と一緒に由子のお悩み相談をしてみました。私は「もっといっぱいねむりたいのにねむれません」、美也子は「さいきんのドラマがつまらなすぎてこまっています」と書いて渡しました。

数日後、由子からの回答が返ってきました。「ママのなやみは、由子がいつもやっている、ひつじをかぞえること、むりをしてねるのではなく、ねれるまでかぞえる」「美也子ちゃんのなやみは、ちがうドラマをみる、ろくがする」という、なんとも由子らしい的確なアドバイスが書かれており、二人で笑ってしまいました。そして、回答が入っていた封筒の裏には「いまならわりびき！いつもは10000えん！これからもよろしく」と書かれており、無料じゃなかったのね！と、またまた笑ってしまいました。

牧野　由紀子



養護メモ 138

養育論の試み その8

隣る人6

菅原 哲男

男女七歳にして席を同じうせずは、儒教の礼記にあるという。このような考え方は、20年ほど前まではこの国にも影響があったものである。

また児童養護施設設置最低基準にも、入所している児童の年齢等に応じ、男子と女子の居室を別にすること。とある。（児童福祉施設の設備及び運営に関する基準四一条三項）

通常の児童養護施設には男女の別をかなり厳しくして設置されている。いわゆる男子棟女子棟などに分かれて暮らしている。男子の部屋と女子の部屋がフロアで仕切られている、などである。

児童養護施設を利用しなければならなくなった原因の多くに、親の性的な逸脱が絡んでいることが多い。だから適切な性意識の養いは重要なのである。

東京の婦人保護施設の利用者の20％超が児童養護施設の出身者であるという（買春防止法制定50周年記念誌・東社協）。

児童養護施設光の子どもの家もその例外ではないのだ。普通高校を卒業して社会に出て行く。そこは、高卒用の社会でも児童養護施設出身者用に作られたはたらき場でもないのである。品のある者もない者も一緒くたに生きている場所なのである。

適切な性意識を涵養していくに当たり、関わる者たちが適切な性意識を共有していかなければならないのである。

人生の終末を目前にして、重い問題ではあるが触れないわけにはいかないだろう。

私はこれまで自身が適切な性意識を養われてきた者である、と言うわけにはいかない。十代の後半から約半世紀ほどは、淫らで猥雑な煩悩に突き動かされて生きてきたと言える。人には決して言えない自らの貧しい性意識であったことである。

自らの性について誰にでも明晰判明に表すことのできる者は居ないだろう。イエスは、女をみて淫らな思いをした者は姦淫を犯したことになると言った。週刊誌や雑誌などにあふれる性情報は、需要と供給の質量を表しているだろう。人には恥部という部位があり、どんな文化を持つ社会でも布で覆い、そこを明らかにはしないのである。それ故適正な性意識の共有は大いに困難なのである。

佐藤協子臨床心理士から読むように勧められてそのままだった、「性暴力の理解と治療教育」（藤岡淳子・誠信書房）を斜め読みに読み飛ばしてみた。

関係性の病としての性暴力―感情・認知・行動の悪循環などの記述、また「ほとんどの社会でほとんどの時代、女性であることは、男性によって身体的・性的に暴力を受けることである。知らない男性には気をつけろとは言われるが、知っている男性に気をつけろとは言われない。しかし、実際に女性が暴力被害を受けるのは、身近な男性からでもあり、日常生活で暴力は普通に生じている。」刮目させられ、痛みを感じないで読むことの困難な書であった。

さて関係性の病としての性暴力という規定は、性が関係性の中で現れるものであることを意味している。

児童養護施設の利用者は、家族も含めて人間関係の上手でない者といえるだろう。白か黒以外のグレーを知らないのではないかと思われることがしばしばである。

関係は関わる相手を理解しなければ形成できない。その相手理解がうまくいかないのである。かなり相手を理解していたとしても、関係性の維持や向上は相当なエネルギーが必要なのだ。

相互に理解するためには相手と自分が違う存在であることを知らなければならない。違いを相互に認識し、容認することが関係形成には必須のことである。男子は男子だけで暮らしていたら女子の理解は困難であろう。互いにそうなのである。だから児童養護施設光の子どもの家は、子どもたちの生活集団を、一担当者につき5名以下、年齢縦割り、男女混合で構成してきた。入浴なども一次性徴が現れる頃を分ける基準にしながら、幼い間は大人と一緒に男女の区別をせずにしてきた。貧しい言葉や絵図などで、かなり大切な性などの違いについて伝える愚を避けたかったからである。

私は男尊女卑が色濃い時代の秋田の田舎のいぶせき家に、4歳上の姉と2歳下の妹に挟まれて6人のきょうだいと共に育った。著しく変化する女性の不思議さに10歳前後に遭遇したことであった。父母から女の子は弱いから助けなければならないことを口やかましく言われてもきた。それでも適正な性意識が養われたなどと、決して言うことが出来ない貧しさを今も託つのだから。

子どもたちが、やがて真の意味での隣る人に出会うことを願いながら。

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

今年度は例年になく、たくさん雪が降った年度でした。雪の積もった庭で、色とりどりのコートを着た子どもたちが雪玉をころがしている様子は、見ているこちらをとても幸せな気持ちにさせてくれます。

皆様、お元気でいらっしゃいますか。

昨年末に入所してきた幼い子を、「かわいい！抱っこさせてよお。」と、笑顔で追いかけ回している理奈に、

「理奈が来た時は、もっと小さかったんだねえ。かわいかったよねえ。今もかわいいけどさ。」

と言うと、

「かわいくないから。まり子さんは、そうやっていつも甘やかすから駄目なんだよ。」

と、最近は言い返す内容も一人前です。

先日も、

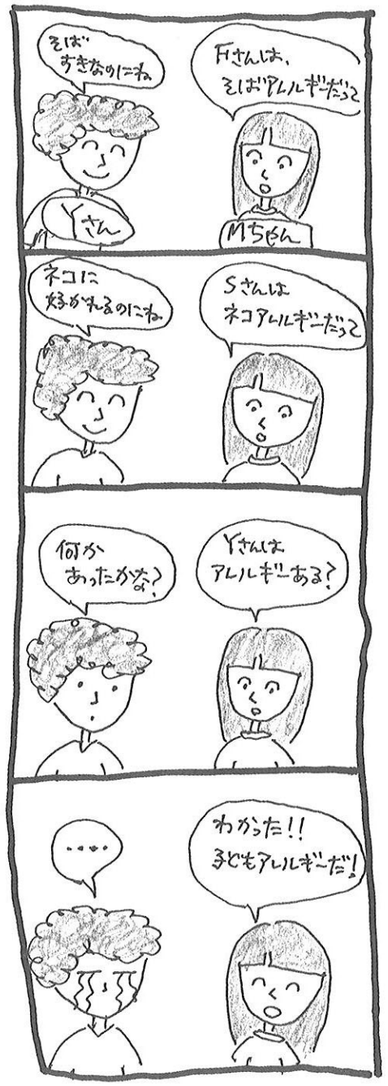
「何で紛争とか起こるの？」

と尋ねてきたので、できるだけ丁寧に私の中のありったけの知識と誠意で話していると、

「まり子さんの話は長い！もう2分も経ってるよ！宗教なら宗教って言えばすぐ終わるのに……！」

「いや、そんな単純なことじゃなくて……」

「もういい、面倒臭い。」



さっさと食器を片付けて立ち去る後ろ姿を呆然と見送ってしまいました。

考えてみれば、もう理奈もそんな年頃です。自分があのくらいの年頃は、もっと酷いことを両親に対して思っていたし、口にしていたと思います。何の学習をしていたわけでもないのに、両親のあの忍耐強さは何に支えられていたのだろうかと、今更ながら頭が下がります。

洋服なども私と同じサイズになった理奈。

「まり子さんは、そういうところが駄目なの。いつも言ってるでしょ。」

などと、私へのダメ出しが一番多い理奈。急激に大人びてきている一方で、

「おんぶして。もう重いからやだ？大きくなってもおんぶしてくれるって言ってたよね？」

みんなが寝静まった時間だったので、理奈も私も懸命に笑いをこらえながら、えっちらおっちら私の部屋から理奈の部屋へ。

「あ、スリッパ忘れた。」

と理奈。またそのままUターンで、えっちらおっちら。照れていたり、楽しかったり、幸せだったり、おかしかったりで、その間2人でずっと笑っていました。

お互いに小さかった頃や若かった頃に戻ることは出来ません。あの頃の、どこへ行くにも私の首にかじりついていた小さな理奈はもう居ませんが、あの時の理奈も、あれからの理奈も、たくさんの〝記念日〟とともに今の理奈に重ねて見ることができます。それは、本当は〝当然〟なのですが、決して当たり前ではないので、本当にラッキーでありがたいことだと思っています。

桜の花が咲く頃には、どの子どもたちも1ステップ階段を上がっていきます。前に後ろに、子どもと大人の間を大きく揺れながら成長していく彼らのそばで、たくさんの記念日を一緒に重ねていけたら、と思います。

2013年度も基準外職員確保のための
バザーを行います。バザー用品のご協力を
よろしくお願いします。

☆光の子どもの家バザー実行委員会☆

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2012年12月1日▶2013年1月末日

２０１２年１２月現在
幼児５名　小学生16名　中学生８名　高校生７名　計36名

１日　幼稚園で表現発表会　かわいい幼児さんたちの寒さも吹き飛ぶ元気な発表　普段は見られない緊張した顔も
２日　第一アドベント
７日　小学校との定期連絡会　先生方のご協力により綿密な連携が可能となっている　感謝
９日　第二アドベント
１０日　小学校との定期連絡会　２学期の子どもたちの様子を共有して３学期に向かう　感謝
１６日　第三アドベント
１７日　施設内研修　毎年この時期に日本社会事業大学藤岡孝志先生が講師を務めてくださり学びの場を保障されている　感謝
２３日　第四アドベント
２４日　燭火礼拝・キャンドルサービス　ロウソクの灯りのもとで一年を振り返ってメッセージを贈り合う静かな時　小さい子どもたちは途中で夢の中へ
２５日　クリスマス礼拝・ページェント・クリスマス祝会　来訪してくださったたくさんのお客様の前でイエス・キリスト降誕劇を礼拝として行う　光の子どもの家が最も大切にしている行事である
２８日　餅つき　みんなで搗いたお餅を頬張る　お正月に食べるお餅は伸し餅に　もち米は地元のイチゴ農家の大塚様より頂いた　感謝

２０１３年１月
１日　職員も子どもも全員揃っての元旦礼拝　卒園生も多数集まる一年の中で人口密度が一番高い日　賑やかな新年のお祝い
５日　正月気分をぶっとばそう会　３学期はあっという間に過ぎてしまうので正月気分はここでサヨナラ
１１日　東大宮教会山ノ下恭二牧師による夕礼拝　司式説教奉仕感謝
１４日　昨年亡くなった卒園生の安田貴志記念会　正月にも集まった卒園生たちがもう一度来て参加　あいにくの大雪で来られなかった卒園生の分もみんなで心を寄せ合う
１５日　施設内研修　評論家芹沢俊介氏をお招きする　養育の基本について学びなおす　感謝
１９日　聖学院大学ワーク　子どもたちと遊んでくださる　感謝
２０日　東大宮教会教会学校教師との懇談会　長年にわたる篤いご協力に感謝
２１日　中学校との定期連絡会　中学生の様々な表現をどう受けとめるか　更なる連携の必要性を確認　感謝
２６日　光の子どもの家後援会によるそば会　今年一年も頑張ろうという励ましをいただく　感謝

〈１２月１月の物品ご寄贈者〉
中村久美子　嶺澄子　小林典子　富士見ヶ丘キリスト教会　松本明子　神田まさよ　横村スミ子　浜田文昭　橋本泰子　株式会社チュチュアンナ　東洋英和女学院小学部　豊国道江　斉藤直子　大渕ヤス子　宮本美和　岡村真夕子　伊村明子　真中歯科医院　茂木由美子　三国コカ・コーラ　プレナス　ネッツトヨタ　毎日新聞　福利厚生センター　和泉みどり　田島義敬　山野井勝司　椿晋・幸子　富田農園　株式会社カーブス　大塚東一　井上高明　古河ビームス　セカンドハーベストジャパン　井原栄子テイラー　岩田弘枝　加庭砲三　根岸亞麗朱　渋井みさ子　谷本和子　他多数の各位さま
☆２０１２年度も大変多くの方々に支えられました。心より感謝申し上げます（洋）

反射光

☆矢のように過ぎる時間の中で２０１２年度を終えようとしております。年度通して多数の方々にお支えいただき、あらためて感謝申し上げます☆今年の中学３年生は志望高校に無事合格し、高校３年生もそれぞれ進学や就職など進路が決定しております。順風満帆とはいかない日常の積み重ねの中でもしっかりと次に向かって歩みを続ける子どもたちの姿を前に、見習わなければならないと思わされております☆私たちはもう一度理念に立ち返って歩み出さなければならないと、前号の小欄にて述べました。そのための学びとして施設内研修を毎月行っております。新たな年度を迎えるにあたって、養育、子ども、生活とは何かなど、基本的な項目を根本から問い直す機会と捉えています。研修を通して、新しい何かを得ようとすることよりも、光の子どもの家は何を一番大切にしていくのかという問いを何度でも繰り返していくことが今必要なのです☆矢のように過ぎる時間に竿する意志を持ち続け、新たな年度を迎えます。今後ともご支援よろしくお願い申し上げます。（洋）